

悠久の時間

1700年代にジェームズ・ハットンは‘地球は古い’と言い広めました。ハットンは（彼の地質学の見解として）地層が悠久の時間をかけ、ゆっくりとした営みで徐々に堆積したと考えました（斉一説）。実際、悠久の時間をかけて観測することは不可能です。にもかかわらず、彼は、地球は何百万歳（後に何十億歳）であるという説を打ち立てました。チャールズ・ライエルはその説をさらに発展させ、著書で広く紹介しました。



チャールズ・ライエル 1840年英国学術協会グラスゴー会議にて *Painting by Alexander Craig, from Wikipedia (altered)*

1839年、チャールズ・ダーウィンはライエルの著書‘地質学原理1’を携えて帆船ビーグル号に乗り込み、南米への5年間の航海に出ました。彼は、その本に書かれた長い歴史年代を基にして、複雑な生物は最も単純なものから何億年もの時間をかけて進化したと考えたのです。悠久の時間さえあれば・・・生命体のわずかな変化が大きな変化に至るのでは・・・という彼の憶測は進化論と呼ばれています。このように、ダーウィンは、最初、地質学者として岩石の中に何億年という年代の証拠を探していました。

後になって、隕石の‘年代’が45.5億歳で、地球の岩石より古いとされました。そして、隕石の年代はすなわち太陽系の年齢であるとされ、疑問の余地がないとされています。そして、その年代はあらゆる証拠解釈の支配的枠組みになっているのです。この世界観が君臨している限り、長い年代の信仰はくつがえされることはないでしょう。しかし一方では、その‘架空’の年代は太陽系の成因を説く星雲説とは合わないで拒絶されているのです。



そして、時を経て、いっそう古い宇宙の年齢が要求されてきました。彼らの年代決定法では、多くの球状星団は銀河よりも、さらには宇宙自体より古いことになってしまったからです。宇宙においても危うい綱渡りのような方法で年代が決められています。ここでも、ハットンの斉一説のように不確かな憶測に頼っています。天文学者は数回巻いた銀河の年齢は数億年であるとしています。しかし、一方では、全ての物質はビッグバンでできたと信じられていて（信仰であるということに注意）、すべての銀河はビッグバンの10億年後に形成され始めたと言っています。これは矛盾です。そういうことなら銀河が巻き始めてから100億年以上経っているはずなのに、多くの観測された銀河で渦巻きが50回転に達する

ものはありません。銀河が巻き始めてから十分な時間が経っていないということです。要するに、渦巻き銀河がどうしてできたのかわかっていないのです。そういうことで、100億年という銀河の年齢を擁護する密度波理論が提唱されました。この理論は（ビッグバンの）信仰的枠組みで提唱されているのであって、ビッグバン以外の可能性を無視しています。



同様の矛盾に未だに太陽系に來入する彗星があります。50億年前に太陽系ができたのなら、なぜ彗星が朽ち果てずに残っているのか？ということです。彗星は太陽に近づくと蒸発し、太陽系内でそのほとんどが分解してしまうからです。やはり、ビッグバンの世界感で言い訳が考えられています。観測はできないが、約50億年前に太陽系ができ、当時より巨大な彗星の物質の雲（オールの雲）が太陽系の外側に球殻状に存在していて、それが絶えず彗星を送り出して来たと主張されているのです。

科学主義は科学ではない

光の速度、極めて高速の数値が計測された後、宇宙は古いはずであると主張されました。いわゆる、天地創造以来、最も遠い銀河の光が地球までの100億光年もの距離をどうやって届いたというのか？聖書が教える6千年という世界の歴史は果たして本当か？世界創造から6千年しか経っていないのなら、光は6千光年の距離しか進まないのではないか？という論法が起こりました（光年とは光が1年かけて進む距離のことです）。

よく考えてみてください。これは科学ではありません。科学主義です。その考えには前提となっている世界感があるのです。非聖書的世界観です。彼らは憶測の上に憶測を重ね、科学に見せかけた複雑な憶測による体系を作り上げたのです。このパラダイムは揺るぎないものとなって君臨しています。

さて、このことに異議を唱えるのは新たな観測事実でも新たな解釈でもありません。同じ観測事実が宇宙全域にわたって聖書に書かれた歴史時間に一致するという事実です。すなわち、聖書に書かれた歴史と観測事実との間には矛盾がないということです。聖書を文字通り信じない場合のみ矛盾が生じます。

もう一つの核心的な問題解決の鍵はアインシュタインの相対性理論です。彼は宇宙において、時間是不変ではないと理解していました。時間の流れは観測者の運動や位置によって変化するのです。時間はどの観測者にも同じ割合で流れているではありません。それで、最も遠くの光が地球に届くのに百億年かかるのだから宇宙は百億年以上存在していると決め付けるのは証拠を独自解釈していることになるのです。

全てを知る人はいません。科学者は皆、自分の世界観を持っていますが、それは信仰と言えるものです。見たものを‘解釈’したに過ぎないからです。科学で不確かな事、たとえば何かの年齢について、それは分かっていると言うならそれは全く科学主義です。このことは、地質学、生物学、宇宙論など、科学的探求と言われている分野においても当てはまります。

たとえば、年齢の証拠とされている化石、隕石、何百何千も重なった地層（例：グランドキャニオン）、大きく赤方偏移した銀河の光（大きく赤方偏移した天体は遠距離にあると解釈されている）を見ても年齢を直接示す証拠は何一つありません。ただ憶測によって年齢が決められているのです。

結論

表題の質問に答えましょう。人は、宇宙の背後に、宇宙も人間も創造した神の存在を認めたくないからです。神（創造主）とは、（人は自己中心であり、他より上に立ちたいという願望を持っているという意味で）罪のある人間を道徳的基

準に従うことを要求する存在であると考えているからです。ですから、創造主という概念を消すために、宇宙は創造されたのではなく、偶然と自然法則によって進化したと言うのです。それで、自由になれると考えているのでしょう。

神（創造主）を信じながら科学主義の世界感を持つのは不条理です。創造主のみことばを恥じ、科学主義を信じてその解釈を選び取っているということだからです。

詳細は以下をご覧ください

ジョン・ハートネット博士のオリジナルサイト：
<http://johnhartnett.org>

参考図書：

* Starlight, Time and the New Physics; John G. Hartnett, <http://creation.com>
* 上記の邦訳書「光年の謎と新宇宙論」；ハートネット著
<http://gophertree.jp> <http://b-c.jp>

著者について

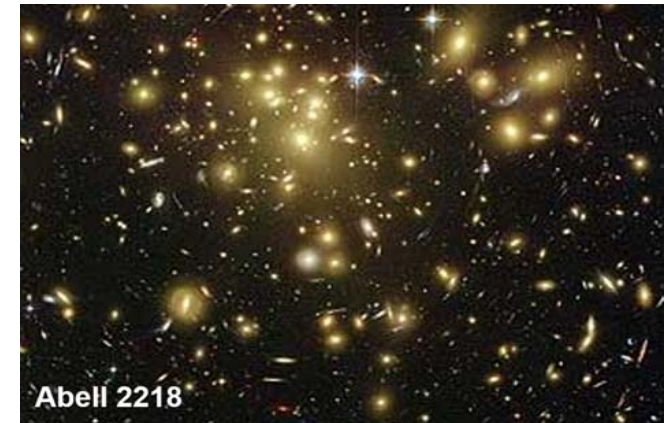


ジョン・ハートネット博士はオーストラリアの物理学者／宇宙論科学者で、聖書の創造論の世界観を持つクリスチャンです。ウエスタンオーストラリア大学から理学士（優等）と理学博士号（特待）を授与されました。現在、オーストラリアの指導的大学においてオーストラリア学術研究会（ARC）の DORA（Discovery Outstanding Researcher Award）フェローであり教授です。200 以上の論文を科学誌や書籍に掲載、また学会で発表してきました。博士の研究はサファイヤ結晶の共振を用いた超高精度マイクロ波発振器と光共振器の開発、そして超高精度発振器を用いた特殊、一般相対性理論など物理理論の基本検証法などです。

宇宙の年齢が 6 千歳？ 信じがたいのはなぜ？

ジョン・G・ハートネット

B. Sc. (hons), Ph. D



創造主によって聖書にこの世界の歴史がはっきりと記されています。創世記第 1 章を字義通りに理解すれば、地球、太陽系、そして全宇宙の始まりは時をさかのぼることせいぜい 6 千年です。この年代は、創世記第 5 章と第 11 章に書かれた家系図、歴代父子の記録から来ています。その歴史年代をさかのぼれば創造の時点にたどり着きます。すなわち、この世界の歴史はおよそたったの 6 千年ということになるのです。

では、多くの人がこの歴史年代を信じないのはなぜでしょう？科学的でないという意見は当てはまりません。多くの方は科学的と言われる別のことを信じているからです。そのことは科学‘主義’であって、科学ではではありません。それは信仰であり、世界感です。人間の知恵であらゆることが分かる、それを科学と称して、究極的に科学で何でも解決できるという信仰、世界感なのです。